



ヨシムラ理論



まるど88

ヨシムラ理論

宇宙船は、虚空を目ざして飛んでいた。中には、国際宇宙協力隊と呼ばれる、世界各国のボランティアの若者達、十数名が乗っていた。

この宇宙船には天文学のエキスパートはひとりだけだった。天文学者の吉村吉造氏である。

宇宙船の中で彼は、ボランティアの青年達に、勉強会を開いて講義した。なにしろ時間はたっぷりある。来る日も来る日も、星のまたたく変わりばえのしない景色が続くのだから。これでも、光速に近いスピードで飛んでいるのだ。それでも、広大な宇宙を旅する手段としては、光速とはなんと遅いことか。

「光速とはなんと、遅い事でしょう、皆さん。私達は今、光速の約九〇パーセントのスピードで飛行しています。じつは、光速に達すれば、もっとずっと早く、目的地に到達出来るのですが。」

だから、光速が遅いのではなく、それに近い亜光速が、遅いのです。光速は、しかしながら、技術的な難題が多くあり、この宇宙船では出せません。ほら、窓から見てもらえば分かりますが、星々が、進行方向に固まって見えるでしょう？ 横とか、後ろの方には見えない」

「先生、ほんまですわねえ。窓からいま、初めて外をのぞいたんですが、操縦席から見えるほうに、いっぱい星が見えますね。なんでですかあ？」

「うん、今日の講義はここまでにしておこう。まだ時間はたっぷりあるから。追々、そのへんのところも説明しましょう」

「先生、先生」

「なんですか」

「光速やったら早ようて、光速に近かったら遅いて、どういうことやのん？」

「うん、それはね、光速になってしまうと、一瞬にして目的地まで行けるのだ。つまり、空間がぎゅっと縮むのだよ。しかし、亜光速では、空間の縮み方はまだ、ずっとゆるい」

「なんかよう分からんわ。もういっぺん説明して下さい」

「分かった。では次回は、このまえ詳しく説明した、アインシュタインの相対性原理について、もういちど、説明しましょう。もういちど」

「ええ？ そんなん、やったあ？ いつ？」

「おとついで」

「そやったあ？」

「では、今日の講義はこれで終わります。今日は、二四〇〇（にいよんまるまる）時まで、自由にしてよろしい」

『やれやれ、何度説明しても分からん連中だな。いや、分かっているものいる筈なんだが、あの、日本の、大阪から来たあの女、あれはいかなあ、質問ばかりして来よるが。同じ質問ばかり。日本の恥だ』

と、椅子に深く腰かけて、吉村氏は思った。五十セントでも、六十円でも、一ルピーでも、その他いろんな国の小銭でも使えるコーヒーの自動販売機のところへ行き、紙コップのコーヒーを飲む。そうして、コーヒーを飲みながら、宇宙を眺めるのも悪くはなかった。もっとも、飛行を始めてひと月経った今では、変わりばえしない窓外の風景に、少々飽いた感はあるが。

この宇宙船は、ぐるっと四方に大きな窓があって、見はらしが良い。三階建てになっていて、ここ二階が操縦室や、この、講義室になっている、間仕切りのない部屋である。一階は、若者達各々の部屋とか、吉村氏の部屋、娯楽室等があり、いわば生活空間である。

三階は、観測、研究、地球への報告等の行なえる部屋が、各々いくつかある。

先生、窓から今、初めて外を覗いたんですが、彼女はとうとうもりなんだろう？ 毎日、テレビゲームをあの娯楽室でやったり、或いは、うつむいてばかりおったのか？ 見まわせば、いつでも外が見えるじゃないか。なんか、頭が痛くなってきた。ああ、誰か私と同じレベルで語りあえる学生はおらんのか。

次の日、いつものように吉村氏は、国際宇宙協力隊の青年達を相手に、天文学の講義を行っていた。

「皆さん、今日はいよいよ、なぜ私達が、4.5光年もの距離を飛んで、宇宙探索をする事になったのかという、いわばこの飛行の核心ともいべきお話をしましょう」

「先生、先生」

「えっ」

「また、あいつか。なんだ？」

「ま、要点は手短かにね、吉田さん」

吉村氏は、作り笑いを浮かべながら、言った。

「わかってますよ、先生。先生あのね、もう私達、その話何べんも聞きました」

「どこで？」

「研修会で」

「ああ、それは具体的な、例えば旅行は五年かかるとか、医薬品その他の準備の事とか、いわゆる日常における注意のようなものでしょう？」

「はい」

「いや、今回お話するのは、この、皆さんの青春時代の、五年という長い歳月を犠牲にしてまでもやってもらうことは、どういう目的があり、意義があるのかということを」

「先生、それも聞きました」

「ええっ？」

「研修会で聞きました。私達、遺跡の発掘をするんでしょ」

「そうだ。しかし、遺跡があるかどうかも、確信は、ない」

そう言って、吉村氏は静かに目をつむった。

「ええっ、先生、それどういう意味ですか？ なにもないかもしれへんのん？」

「うん、そうだ。可能性としては、遺跡の存在する確率は50パーセントだ。それについて、これから私の話を聞いてもらいたい」

「何言うてんの？ 私、ただ、なんにもないところへ行くかもしれへんのん？」

「うーん、まあ」

「そんなん、無駄やないのおっ！」

「まあ、私のいわゆる、『吉村理論』と呼ばれ、世界的に注目された学説を聞きなさい」

「そんなんいややわ、五年も！」

「いや、だからね」

「うそつき！」

「どうして!？」

吉村氏も思わず、彼女につられて興奮し、椅子から立ち上がった。吉田さんは、大きい顔をますます、ふくれっ面で大きくすると、急に席を立て、階下へ下りて行った。「ま、失礼」

うるさいのがなくなったので（彼女はもう何か月も続く単調な飛行に、精神が参ったのかもしれないが）、ゆっくりと、吉村氏は講義を続ける事が出来た。

「私が今回、例の、世界的に注目を集めた、いわゆる『ヨシムラ理論』を実証する為、この宇宙船に乗り込んだのですが、そのさい、世界的にボランティアの青年達を募集しました。そして、ここに居るのが、あなた達、十五人、吉田さんは今ここにいない

ので、十四人ですが、皆さんがたであるわけです。

私達はいわば、現代のコロンブスなのです。

現代の天文学は、宇宙が誕生してから約二百億年であると割り出しています。そして、じつは、二百何十何億何千何百何十何万年というところまで正確に、科学の力は割り出す事が出来ました。

宇宙創成の頃は、星々は今のよう、広い空間に散らばっているのではなく、ひとところにぎゅっと固まっていた。そして、それが何かのひょうしに大爆発したのです。これを『ビッグバン』といいます。

今の宇宙は、この、いわばビッグバンで四方八方に星々が飛び散って行きつつある状態なのです。

今のように星々が飛び散ってしまってお互いに遠く離れているときには、もし私達のように宇宙船を駆使出来る高等動物がいても、行ける範囲が近辺に限定されます。つまり、私達が今、行こうとしている、私達の太陽系の隣の惑星系くらいが積の山なのです。

しかし、今から何億年も昔であれば、星々はお互いに近かったのだから、その時に、もし高等動物が生きていれば、いろんな星にその足跡を残し、畑を耕したり町を作ったということが考えられる。

これがいわゆる私の、『ヨシムラ理論』です。今現在、考古学者と地質学者が、何億年も前の地球上の古い地層を点検しています。まだはっきりとした証拠はあがっていませんが、地質学者と古生物学者の見解では、約三億年前の、デボン紀と呼ばれる時代、この時代には、魚が随分と減っている。それと、約一億年前の、白亜紀の時代、この時代に、恐竜やアンモナイト貝が減っている。この頃に、宇宙人が随分と地球上の生き物を捕って食ったのではないかと、言っております。

私は私で、天文学者として、計算によって、もしデボン紀、或いは白亜紀に地球を訪れた高等動物がいたならば、当時の宇宙の大きさから、ことごとく、あそこ星に住んでいた可能性があると、割り出しました。

最も可能性の高い天体は、現在はあまりにも遠く、百年位かかるので、現代の技術で可能な限りの、まあ、あるかもしれないという線で、今回行く惑星が選ばれたのです。皆さん、分かりましたか？

地質学者はまだ、地球の古い地層から宇宙人の痕跡を発見してはませんが、私達が、今から行く星で、それを発見する可能性があるわけです。私達人間にとって、未だに発見出来ないものは、他の星に住む生き物です。もし、遺跡が発見出来たり、或いは、宇宙人そのものを発見出来れば、私達は人類の歴史に、最大の貢献をした事になるのです。なんて楽しい旅なんでしょうねえ、そう考えると。

ま、私達は、いわばコロンブスになって、アメリカ大陸を発見出来るかも知れぬ。出来ないかも知れぬ。ということですよ」

『うんとか、すんとか言ったらどうなんだ？ この連中は、大人しいというか、なんというか』

そのとき、ひとりの青年が叫んだ。

「あーっ！」

「なんですか？」

「あれ、見て下さい。先生」

青年が指差す方向、窓外を見やると、小型ロケットがこの宇宙船には積んであるのだが、それが、この宇宙船を離れて、飛んで行くのが見える。

「誰だ？ 乗っているのは！」

数時間後、吉村氏は宇宙服を着て、ふうふう言いながら、やっと小型ロケットにへばりついたところだった。命綱が、ゆらめきながら母船の宇宙船と、彼の体とを結んでいる。

無線で、必死に説得した結果、小型ロケットは噴射をやめて、宇宙船のそばに漂っているのだった。吉村氏は、ロケットの中に入り、吉田さんをなだめた。

「先生、私もう帰る」

「こら、わがまま言っちゃいかん」

「先生、これなんの為のロケットなんですか」

「これは、母船が壊れた時の為、緊急用なのだ」

「だったらこれで、地球まで帰れるんですね」

「帰れるよ。しかし君、そんなに帰りたいかね」

「先生が、あんな事いうから！」

「どんな事かね？」

吉村氏は、ほんとうに自分が何を言ったのか忘れていた。頭がこんぐらかっていたのだ。だが、こう言った。

「ま、わたしが悪かった。な、このロケットを母船に戻そう。わかったね」

「はい」

「私達は、これだけの努力をしたんだから、きつといい事があるよ。約束する」

『疲れるなあ。いっそ、地球へ送り返してやろうか。しかし緊急の時に、このロケット、いるしなあ』

「それにね、吉田さん。こんな小さなロケットで地球に帰るなんて君、テレビゲームも無ければ、スピードも遅いし、それに君、

目的地の惑星までは往復、母船でだと五年で行って帰れるが、この小型ロケットじゃ、十年かかるんだよ。娯楽室も無く、食べ物も、するめよりもっとひどい、宇宙食の非常食しかないんだよ。それより、母船のみんなといた

ほうが、楽しいじゃないか」

「……、そうですね」

「じゃ、私に操縦桿を握らせてくれるね。母船に戻ろう」

「そうします。すみませんでした、先生」

『やれやれ、阿呆はこれだから助かる。今は地球を離れてまだ一か月の地点なのだから、いくらこの小型ロケットが倍かかるといったって、地球まで二か月あれば着くんだよ。うまくひっかかって良かった。それにしても、小型ロケットをなくして、母船だけじゃ、故障したとき、ことだからなあ。あー良かった』

さて、一行はそれからは、トラブルらしいトラブルも無く、二年と四か月かかって、目的地の惑星に到着した。

そこは、砂漠のような惑星だったが、大気があって、空は明るかった。地球から4.5光年の惑星も、亜光速では2.5年で無事、到着出来たのだった。

ラビアさんという、アラビア人の若い女性の隊員（アラビアのなんという国かも吉村氏は把握していなかった）がいて、飛行中、仲良くなっていた（と、彼は信じ込んでいた）。

「ラビアさん、あっちのほうの、穴を掘ろう」

ヨシムラ氏はラビアさんを連れて、近くにスコップで穴を掘った。

吉田さんも、機嫌をだいが取り戻して飛行中、他の仲間ともゲームなどしていたが、その吉田さんが、やはりアラビア人のオスマン君の横へ行き、ヨシムラ氏らのほうを指差して、何か言っていた。

オスマン君は、体格の優れた、しかし、きわめて無口な青年だった。飛行中も、ヨシムラ氏を混じえて、みんなでババ抜きをしていた。こういうことがあった。

「ほら、ラビアさん、わしのババを引いた！ 次は、オスマン君の番だ」

ヨシムラ氏がはしゃいで楽しんでいるのと対照的に、オスマン君は、ぶすっとしてラビアさんのトランプから、一枚、引いた。

「ラビアさん、スコップはそう持つんじゃない。こう持つんだ」

ヨシムラ氏は懇切にいいに、スコップの持ち方をラビアさんに教えていた。一時間ほど、宇宙船の着陸したあたりで、皆、

スコップをふるっていた。何も出なかった。ヨシムラ氏は、そこいらのみんなに向かって言った。

「この惑星に関するデータは、地球からの観測で、ある程度分かっていますが、私達の太陽に相当するあの恒星から、紫外線がたくさん地表に降り注いでいたら困るので、今日はここまでしておきましょう。地球からの観測では、そんなに危険では無い筈だが、ここはごらんのとおり砂漠です。紫外線と、この惑星の大気の調査は、オスマン君、それに、そうだな、吉田さんにや

つてもらう事にします。では、宇宙船に戻りましょう」

オスマン君と吉田さんの調査によって、地球での観測とほぼ同じ値、地球ほどに快適ではないが、宇宙服を着けなくても暮らせるほどの酸素と水があり、サボテンに似た植物が生息しており、紫外線も少ない、ということが分かった。既に一週間が経過していた。

吉村氏は心中、少しあせっていた。三々五々、穴掘りをしているのだが、高等生物の形跡となる遺物は何も出なかったのである。ただ、ところどころ、地平線を見渡すと、サボテンのような植物が生えているだけである。

吉村氏はしかし、重大な見落としを行っていた。高等動物はいなくても、この星にはところどころ、サボテンのような植物が生えている。彼は、地球外生物の、最初の発見者になっていたのである。

だがヨシムラ氏は、遺跡や高等動物に頭がとられていたことで、その事にまったく気が付かなかった。「ただのサボテンしか生えたらんじやないか。早く遺跡を見つけなくては」と、アセっていた。形がサボテンに非常によく似ていて、なじみ易過ぎたのもわざわざしたのだ。

まあ、その後、「遺跡も見つからなかったし、とんだ骨折り損だった」と、ぶうぶう文句を、地球での記者会見で語った、ある人物が、ぼろっともらしたサボテンの話によって、ええっ!? 地球以外にも生物がいたのかあ! てな事になり、結局、その人物が最初の地球外生物の発見者ということになる。おまけにその人物は、巧まずしてそのサボテン様の生物の写真も持ち帰っていたので、それが動かぬ証拠となった。

話が随分と先に飛んでしまったので、砂漠での調査に話を戻そう。

その惑星に着いて、十日が経っていた。相変わらず、遺跡も高等動物のこん跡も、なんにも出なかった。スコップをふるうヨシムラ氏は、半ば覚悟していた事とはいえ、だいがアセっていた。

そんなある日、例の大阪出身の隊員、吉田さんがやって来て、言った。ヨシムラ氏はその時、額に汗してスコップをふるっていた。

「ねえ先生、もう十日もこんな事やってるのに、なんにも出えへんやないのオ。もう、帰りましょうよオ」

「まあそう言わずに、吉田さん、君は宇宙の、他の惑星に来たのは、初めてだろ? こんな経験、滅多にあるもんじゃないんだ。まあ、気分転換に、写真でも撮ってなさい」

「はい」

パチパチと、彼女はそこいら中の写真を撮った。そして、またやって来た。

「先生、もうわたし、写真撮りました」

「それで?」

つい、ヨシムラ氏も冷たく突き放すような言い方をしてしまった。博士号持つ俺が、スコップでどちん仕事してるのに、お前は物見遊山で写真をパチパチか、ええ?

と、口からもう少しで出るところだったのだ。それを我慢したので、つい、つっけんどんな言い方になってしまったのである。

「なによ、もおっ!」

吉田さんは怒って、サボテンに似た植物の陰で、懸命に穴掘りしているオスマン君の方へ走って行った。が、ヨシムラ氏は叫んだ。

「よ、吉田さん!! あのね、私も一人の学者なんだ。こんな、何光年も離れた所まで来て、遺跡の一つも見つからんとあつては」

遺跡の一つも見つからんとあつては、数年のブランクの間に、大学にいるあいつにも、あいつにも、抜かされてしまうだろうがっ! お前らみたいなアホどもと数年過ごしてるうちに、ウラシマ太郎になるのはまっ平なんだよ。と、口には出さなかったが、心で思ってしまった。

「遺跡の一つも見つからんとあつては、学者魂が、私の学者魂が許さんのだよーっ、吉田さーん!!」

サボテンの陰から、血相を変えて走って来たのは、オスマン君だった。後ろから、いやに嬉しそうな顔をして走ってくる、おたく顔の女、吉田さんもやって来た。

「先生、オスマン君ねっ! もう我慢出来ないって、言ってますよ!!」

「な、何がっ?」

「先生ねっ! 未婚の、女性の手を取って、あれこれしたでしょ!!」

「ええっ?」

べらべらべらべらっつと、機関銃のように喋りまくるオスマン君。ヨシムラ氏は、こんなに喋るオスマン君を始めて見た。だが、アラビア語であろう。何を言ってるのかさっぱり分からない。せめて英語で喋れ、英語で。

「あのねえっ! イスラムの掟では、イスラム教徒の女を手ごめにした者は、腕一本切り落とすって、言ってるわよーっ!!」

「ちょ、ちょっと待て。わしはラビアさんにスコップの持ち方その他は教えた。だ、だが」

「先生、オスマン君はねえっ! ラビアさんと婚約してたそうよ!!」

「ええ? そんな事、ラビアさんは全然、わしに。そうだ。ラビアさんと呼ばう。おーい、ラビアさーん! あれ、どこにいるんだ?」

「もう保護したって、オスマン君は言ってるわよっ! 先生それに、ラビアさんにばかり紙コップのコーヒー、おごってたでしょーっ!」

「な、なんでっ! 違う。君にも、おごった事あるだろう? 誤解だ。誤解だよ、いたたーっ!」

ヨシムラ氏のきゃしゃな腕は、あつと言う間に、オスマン君にねじり上げられている。

「皆さーん、ちょっと来てくれーっ。助けてくれーっ!」

いつの間にか、オスマン君は、三日月形の大きな刀を右手に持ち、左手でヨシムラ氏の右手をねじ上げて、そこに刀を振り下ろそうとしている。

オスマン君、吉田さん、そしてヨシムラ氏の三人のまわりに、人だかりが出来た。言うまでもなく。青年国際宇宙協力隊のメンバー達である。

わあー、わあー、と悲鳴を上げているのはヨシムラ氏だけで、あとのみんなは、「なんだこれは?」みたいな顔で、皆冷静である。

「ふんっ」

吉田さんは鼻を鳴らすと、オスマン君に、おそろくアラビア語で何かしやべった。三日月刀が高く上げられ、次の瞬間、

「わあーっ!」

思いっきりけつとばされ、地面に這いつくばるヨシムラ氏の姿があった。右腕は、切り落とされないのですが、今のショックで、完全に脱臼してしまった。

「うわあー、いたたーっ!」

他のみんなはいっせいに、宇宙船の方へと駆けてゆく。何か、下手くそな学芸会でも見ているようだ。ドドドーンー! という轟音と共に、宇宙ロケットはその惑星を飛び立った。

「わーっ、わしを、置いていかないでくれーっ!」

ロケットの窓からは、ガラスにへばりついた、まーるい顔の若い女が、こっちに向かってわめいているのが見える。口許をよく見ると、「ウソツキーッ!」と言っているように解読出来た。

と、宇宙船から、ぼいっ、と、例の小型ロケットが落ちて来た。小型ロケットは、どーんと大きな音を立てて、砂煙を上げて地上に落ちた。宇宙船の母船の方は、見る見ると空の彼方へと消えてゆく。

ヨシムラ氏は、小型ロケットの窮屈な操縦席に座り、虚空を地球目指して飛んでいた。地上にどーん、と落ちた時のショックで、主力エンジンが故障したので今は、補助エンジンを、なだめなだめ、飛んでいる。母船は2.5年で地球に着くが、小型ロケットでは、主力エンジンが調子良くても五年かかるのに、補助エンジンなので、十年以上はかかるだろう。

ヨシムラ氏はもう、毎日毎日、ひとりで宇宙食の、するめより、もっとひどい、チューブ入り非常食料を食べ、三十分のお笑い番組のビデオテープばかり、何千回も観ている(そのビデオテープしか、娯楽が無いのである)。ヨシムラ氏は、このお笑いの内

容を、いやでも全部、覚えてしまった。

いっぽう、2.5年で無事、地球へと帰還した若き隊員達は、いちおう、人類初の地球外生物の発見者として、その労が報いられたのだった。パチパチ撮った写真が、有力な証拠となった。

さて、『ヨシムラ理論』。あの、高等動物が太古の昔に、あちこちの星に行き来していたという推論は、どうなったか？ 知りませんよ、誰も。あれはもう、古い。
(終わり)

ヨシムラ理論

<http://p.booklog.jp/book/109112>

著者：まるど88

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/marudo88/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109112>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109112>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ